

く、學祖梅岩の教説は實にかくの如くにして始めてよく全國に徧く、深く庶民の間に行はれることになつたのである。我々はそこに自己の固有の本性を知り私心私欲を去つてその本性を失ふことなからしめるといふそれ自らは永世不變なる道德が具體的には時代と社會とによつて如何なる形態と如何なる色彩とを與へられるものであるかを最もよく認めうるであらう。猶別に附録として「手島堵庵先生事蹟」「年譜」等を添へてゐる。惟ふに心學の教が近世に於ける庶民の道義の維持發揚に貢獻する所多かつたことは早く故藤岡東圃によつて注意せられ爾來近世の思想史や教育史の攷究を事とする人々のこれが研究に手を染めるものも少なくないがそれらの研究はいづれもかくの如き新しい資料を俟つて一層精緻を期しうべきと同時にまた一の新しい生面をも開くべきであらう。(菊判)

本文六三五頁、京都市新町通二條上明倫舎發行、非賣品)

【柴田】

●新刊 Cambridge Ancient History

續に續けた Bury 二代及び Charlesworth を編者に加へた

紹介

Cambridge Ancient History は昨年九月第八冊を、同十月圖録第三冊 (Prepared by Selman) を相ついで出した。前者は「紀元前二一八—一三三年の羅馬及び地中海」と題し第二次ポエニ戰役の勃發よりベルガムムの羅馬領となる迄を含み、編者 Charlesworth もカルタゴ滅亡後論を出して居る。其他卷頭の Glover の Polybios、Hallward のカルタゴ、Holleaux のマセドニア、Benecke の希臘風文化諸國、があり、尙、Beyan、Rostovtzeff、Ashmole 等が各得意の方面を分擔して居る。後者は第七冊、第八冊に對するもので、貨幣、窯器、金屬製品、彫塑が主で各説明附なるが概して複製の多いのは遺憾の感がある。今少し新材料が得られないかと思ふ。併し古代史に關する著書が増し、この叢書の完成に次第に近づきつゝあるは慶すべきである。以上最近著本した儘、速報的に記す。(昭六—三—九)

●カイロ所在、獨逸埃及古代研究所報告の發刊

Mitteilungen des deutschen Instituts für Ägyptische Altertumskunde in Kairo.

第十六卷 第二號 三三三

一九二九年夏、獨逸國會の議決により、表題所掲の研究所が組織され、その所長にユンケル博士(Dr. Junker)が任命され、羅馬、アテネに在る同種の研究所と等しく報告を發刊する事になった。大體、年二回の豫定ながら、之は必しも嚴守せられない。

第一卷第一冊は本文九十二頁、地圖一葉、圖錄十七葉あつて、序の他に一昨年十一月の下旬より、十二月中旬に亙つて行はれた同研究所の東方デルメ地方特にイスマイリーエ(Ismailiye)運河兩岸の調査旅行(Einhann, Schott, Stier, Junker報告擔當)及び、古代埃及に於ける障壁構造(H. Balez)の二つが收められてある。(發行所 Dr. Benne Fliser Verlag G. m. b. H Augsburg)。

●エイチ・アール・ホール博士(Dr. H. R. Hall)

の逝去

Ancient History of the Near East の著者として知られたホール博士は、伯林博物館の西方アジア部の新館を公式訪問より歸英まもなく、昨年十月十三日忽然として逝去された。享年實に五十七。學者として尙春秋に富み

今後の貢獻を期待すべきであつたのに惜しむべき事である。

博士は一八九六年牛津聖約翰を卒業後直ちに大英博物館の埃及アッシリヤ部に入り、茲に一生涯の事業を定め去る一九二四年バツヂ卿(Sir E. Budge)引退の跡を繼いで主管(Keeper)となつた。元來、埃及學者であつたが多方面に材料を有する博士はミケネ文化についても研究があり The Oldest Civilization of Greece, Aegean Archaeology の著書がある。併し、七版を重ねた前記「近東古代史」は學界に裨益する所が大であつた以外に、大學に於ける好教科書として貴ばれた。よし文献的發表は多いとはいへないが、デル・エル・バフリ、アビドス、更にクリートに於ける發掘調査の事業は没すべからざるものがあり、最近ウル等に於て初代の王の遺物殊に銅製品の發掘の如きは學界に寄與する所多大であり、博士の死の直前脱稿したとき A Season's Work at Ur の早く我國に齎される事を待つ所以である〔以上岡島〕(昭和六、二、二二)